



Title	Relationship between Health Counselor Characteristics and Counseling Impact on Individuals at High-Risk for Lifestyle-Related Disease:Sub-Analysis of the J-HARP Cluster-Randomized Controlled Trial
Author(s)	野口, 緑
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/92918">https://hdl.handle.net/11094/92918</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 論文内容の要旨

## Synopsis of Thesis

氏 名 Name	野 口 緑
論文題名 Title	Relationship between Health Counselor Characteristics and Counseling Impact on Individuals at High-Risk for Lifestyle-Related Disease: Sub-Analysis of the J-HARP Cluster-Randomized Controlled Trial (保健指導介入者の特徴と生活習慣病ハイリスク者への指導効果との関連:クラスターランダム化比較試験J-HARP研究のサブ解析)
論文内容の要旨	
<p>〔目 的(Purpose)〕</p> <p>脳血管疾患、虚血性心疾患、慢性腎臓病のハイリスク者が生活習慣病の重症化を予防するためには、早期に受療し継続的な医療管理が行われることが重要であるが、健診で発見されたハイリスク者に受療勧奨を行っても、その後の医療機関受療割合は高くないことが報告されている。そうした中、全国43の自治体を対象にしたクラスターランダム化比較試験において、高血圧、糖尿病、高LDLコレステロール血症、並びに腎機能低下が疑われる未治療ハイリスク者に対し、「受療行動促進モデル」による保健指導が一般的な保健指導と比べて、健診受診後12か月間の累積受療割合を約4割高めることが立証された(J-HARP研究)。</p> <p>そこで本研究では、受療行動促進モデルによる保健指導の効果に、保健指導実施者の特性(年齢、経験年数、職種)が影響しているのかを明らかにすることを目的にした。</p> <p>〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕</p> <p>J-HARP研究対象者(特定健診結果で、高血圧(収縮期血圧 160mmHg以上、または、拡張期血圧 100mmHg以上)、糖尿病(HbA1c 7.0%以上、または空腹時血糖 130mg/dl以上、または随時血糖 180mg/dl以上)、LDLコレステロール 180mg/dl以上の男性、尿蛋白 2+以上のいずれかに該当)のうち、介入群8,977人を対象に、保健指導者の年齢、一般的な保健指導の経験年数、生活習慣病の保健指導経験年数、職種別に医療機関の累積受療割合を、ログランク検定を用いて比較するとともに、Cox比例ハザードモデルにより、それぞれの要因別に保健指導対象者の姓、年齢、初回保健指導の時期、保健指導の方法、保健指導数、並びにそれぞれの要因を調整した受療比を算出した。</p> <p>その結果、保健指導者の年齢、一般的な経験年数、並びに生活習慣病の保健指導の経験年数はいずれも累積受療割合と関連が見られなかった。一方、職種については、管理栄養士に比べ、保健師による受療比(95%信頼区間)は1.16 (1.05-1.29)、看護師で1.12 (0.95-1.31)であった。</p> <p>〔総 括(Conclusion)〕</p> <p>保健指導者の年齢、経験年数は、医療機関の受療行動に影響を与える要因ではなく、職種が保健師であることが受診行動の促進に効果的であった。保健師独自の専門的な知識、スキル、経験が関与していると考えられた。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 里子 口 糸糸				
		(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学教授	祖父江 友子	署 名
	副 査	大阪大学教授	服部 聡	署 名
	副 査	大阪大学教授	坂田 泰史	署 名
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>全国43自治体の重症化ハイリスク者15,708人を対象にしたクラスターランダム化比較研究により、受療行動促進モデルによる保健指導が、一般的な指導と比べて医療機関への受療行動をより促進したことが立証された。本研究は、介入群のサブグループ研究として、指導者のどのような要因が受療行動をより促進するかを明らかにすることを目的とした。指導者の条件のうち、年齢や経験年数は受療行動と明らかな関連は認められず、職種（保健師、看護師、管理栄養士）と受療行動との間に関連がみられた。生活習慣病の重症化予防はわが国において喫緊の課題である中、未治療の重症化ハイリスク者の受療行動を促すための指導者の要因を明らかにした本研究は、生活習慣病重症化の予防の重要なエビデンスを提供するものであり、学位の授与に値するものと認める。</p>				